ビディ，ファム・ファタールあるいは悪女
――『大いなる遺産』におけるもう 1 つの復讐劇

木　樽　周　夫

序論

Charles Dickens の *Great Expectations*（1860-1）は復讐を中心に据えた物語として位置づけることができる。実際，田舎の名家のハヴィシャム（Havisham）は結婚当日にフィアンセに裏切られ，逃げられたことから，男性への復讐を誓い，養女のエステラ（Estella）を利用し主人公ピップ（Pip）を翻弄する。また，冒頭の場面でピップを襲った囚人マグウィッチ（Magwitch）の妻でエステラの母であることが判明するモリー（Molly）は嫉妬心から別の女性を殺めていたことが語られる。このようにこの小説では嫉妬から生じる復讐が女性の行動を通して詳細に描かれる。

しかし，注目すべきもう 1 人の女性は，ピップの義兄ジョー（Joe）の 2 度のロンドン訪問と，ピップと田舎を結びつける場面に登場するビディ（Biddy）である。ピップと幼馴染みのビディは賢く，地元で子供たちに読み書きの訓練をする彼女の祖母の補助をして暮らしている。彼女は暴漢に襲われたジョーの妻（ピップの姉）を看病し，ジョーの鍛冶屋も支える。彼女は遺産を受け継いだピップのロンドン上京後，ジョーにロンドンでの面会を促すが，彼女の提案によるロンドン訪問は，1 回目はジョーとピップの仲たがいを招き，2 回目の訪問直後にはジョーとビディの結婚が発覚する。また，ピップの姉が亡くなるという重大な出来事が起こってもピップに連絡をしないビディの行動には不可解な点も見られる。ジョーのロンドン訪問時，またピップの帰郷時にはピップの家庭内の異変が起こることから，ジョーの言動や行動にも彼女の影響を疑う余地がある。

年齢差と相手が再婚になることを考慮すればピップとの結婚の方が現実的であったビディがジョーと結婚する結末を見ると，この物語はピップと

ジョーの関係がビディによって意図的に破壊された物語と言えそうである。ビディの行動に復讐の片鱗を見出す本論において，ビディがピップに悪意を抱く動機を考える必要があるだろう。岡本真一郎の『悪意の心理学』はコミュニケーションに現れる悪意について社会心理学の立場から論じたものである。同書を参照しつつ，ビディの言動や行動を分析し，どのような経緯が彼女をファム・ファタールあるいは悪女へと至らしめたのか，また，彼女が引き起こすピップの堕落とは何であったかを考察し，この物語に描かれたビディによる隠されたもう一つの復讐劇を明らかにする。

1度目のジョーのロンドン訪問

この物語では田舎に住むピップとジョーとの2人の男性登場人物の絆の物語と読むことができるだろう。ジョーは“[e]ver the best of friends”（VII, 48）とピップに呼びかけ，ピップもまた，“good-natured companionship with me”（II, 11），“the dearest fellow that ever lived”（XIX, 148）とジョーとの友情を認めている。この作品における友情について Bert G. Hornback は“Jo, his brother-in-law, is his friend in fact, and insistently so, despite Pip's condescension and later neglect.”（p. 35）と一時的な不仲はあるものの物語を通して2人の友情が続くと指摘する。同時に，物語の冒頭から見られるピップのジョーに対する時に軽蔑的な態度や言動とは対照的に描かれる，田舎の鍛冶屋ジョーのピップに対する温厚な態度には鈍感さも窺える。ピップは“a mild, good-natured, sweet-tempered, easy-going, foolish, dear fellow.”（II, 8）とジョーの温厚であるが“foolish”でもある点を指摘する。ただしこのジョーの鈍感さは他の長所と同列で表現されていることからも，2人の仲を保つ秘訣の1つとも言えるだろう。ピップが突然遺産を手にし，鍛冶屋の徒弟を辞めて紳士になるためにロンドンへ向かうことを快く同意し送り出す様子にジョーの誠実さと寛容さが見られる。しかし自分でも“I'm so awful dull”（XIX, 148）と自覚できるジョーが本当に鈍いのか疑問は残る。この物語にはジョーがロンドンにいるピップを訪れる場面が2度描かれる。1度目の訪問で，ピップとの口論の中で2人の対照的な立場を的確に指摘する毅然としたジョーの態度に彼の寛容さを象徴する鈍さは見られず，む

しろ今までのピップとの良好な関係が実は偽りでさえあったかのように思わせる。2 度目の訪問直後，村で読み書きを教えている “the wisest of girls”（XVII, 129）とピップが慕う彼と幼馴染みのビディがジョーと再婚するが，ジョーはそのことをピップに相談も報告もせず，結果的にピップに家庭内の大変化を隠したままにする。ジョーのロンドン訪問の場面から，自分のことが鈍いと気付ける程度にはジョーは鈍くはない，もしくは義理の弟との関係を良好に維持できるように気遣いできるほどには賢い人物である可能性が考えられる。まず 1 度目の訪問の場面から，彼の判断力を分析する。

自分で “I’m so awful dull”（XIX, 148）と自分で言えるほどジョーは謙虚であり，彼の鈍さは彼の誠実さの象徴であるということができるだろう。しかし，ジョーのロンドン訪問の場面ではジョーはピップを追い詰めるほど機転の利く発言をする。27 章で，ロンドンにいるピップを初めて訪れる場面では鈍感どころか，むしろ状況を鋭く観察する彼の態度を見ることができる。ピップはジョーの訪問を “If I could have kept him away by paying money, I would have paid money” と思い，“in some quite unnecessary and inappropriate way or other, and very expensive”（XXVII, 218）にピップが飾り付けた部屋にジョーは異変を感じ，“Joe, taking it[hat] up carefully with both hands,... wouldn’t hear of parting with that piece of property” し，“in a most uncomfortable way”（XXVII, 219）で話す。確かにピップの態度は無礼であるが，ジョーが鈍いならピップの無礼さに気づかない，もしくは寛容な態度をとっただろう。Robin Gilmour は “[p]hysical clumsiness, and the difference between a working-class hand and a gentlemanly hand, are much emphasised in *Great Expectations*. Dickens uses Joe’s clumsiness both as a means of indicating how far Pip has come (for good and bad) from the forge”（p. 122）と，ジョーの態度が 2 人の心理的乖離を象徴すると指摘する。確かにこの場面ではジョーのぎこちない動作はロンドンのピップと田舎のジョーとを対照的に描く。同時に，注目すべきはピップの部屋の居心地の悪さ，もしくはピップによって居心地の悪い部屋に設えられていることに気づき，ぎこちなくなってしまうジョーの敏感さである。その結果 “I want to be right, as you shall never see me no more in these clothes. I’m wrong in these clothes”（XXVII, 224）と自分が

ピップから評価されていないことを認める。田舎でみられたジョーの鈍さや寛容な態度は見られず，むしろ，ピップがジョーに抱く嫌悪感をジョーが知っていたかのようにピップへの非難を表明する。

この場面でのジョーの態度が急変した理由を探る必要があるだろう。彼のロンドン訪問時にはジョーはビディと読み書きの学習を始めている。ビディに代表されるようにこの作品では読み書き能力が賢さの象徴として強調される。読み書きができないジョーをピップは “There was no indispensable necessity for my communicating with Joe by letter”（VII, 45）と考える。その後読み書きのできない理由をジョーに詰問し，ジョーに自分の書いた文字を読ませ，さらに文字を書くように強要する。一方ジョーは自分が読み書きできない理由を丁寧にピップに話す。生活の向上を目的に彼に読み書き能力の習得を促しながらも，“when I came into my property and was able to do something for Joe, it would have been much more agreeable if he had been better qualified for a rise in station.”（XIX, 148）と考えるピップは，ジョーの無教養が及ぼす自分への不利益を危惧している。ピップの彼への蔑視は “Joe's education, like Steam, was yet in its infancy”（VII, 46）という言葉にも露骨で，ビディにも “he[Joe] is rather backward in some things. For instance, Biddy, in his learning and his manners”（148）と言っていることからも読み取れる。岡本真一郎は発話に見られる発言者の心理から，「からかった側はユーモアを示す目的で行ったつもりでも，その気持ちは相手にはうまく伝わらない可能性がある。加害者は被害者よりもからかいを善意で冗談によるとみなす傾向があり，その結果，自分は善いことをしていると感じることになる」（p131-2）と発言者と受け手の内容の受け取り方の不一致について述べる。この場面で，ピップのこの発言内容の被害者はジョーであるが，ビディもまた，ピップの偏見ある態度の被害者でもある。彼女の容姿も ‘her hair always wanted brushing, her hands always wanted washing, and her shoes always wanted mending and pulling up at heel. This description must be received with a week-day limitation. On Sundays, she went to church elaborated.’（44）と表現することからも，ジョーに対するのと同様に，ピップはビディに対しても軽蔑的な視線を向けている。彼女がピップに，“He[Joe] may be too proud

to let any one take him out of a place"（XIX, 149）とジョーを擁護すると同時に，"you[Pip] must know him[Joe] far better than I do."（149）と非難する場面には，ピップとビディの間の認識の違いを浮き彫りにし，ピップのジョーを蔑視する態度へのビディの不快感が表れる。もしくは自分に対するピップの偏見と受け止めているようでもある。ピップが田舎を出た後に残されたビディとジョーの変化について，特にビディがジョーに与えた影響について考えなければならないだろう。

ジョーのロンドン訪問は，ビディからの "I write this by request of Mr. Gargery"（XXVII, 217）と始まる手紙でピップに知らされる。ジョーの依頼は事実であるが，この手紙に彼の意向は反映されていない。ジョーはハヴィシャムからの，ピップのあこがれている彼女の養女エステラが "Estella has come home and would be glad to see him[Pip]"（XXVII, 224）というフランス留学からの帰国に関する言伝の依頼をビディに手紙にするように頼むが，彼女は "I know he[Pip] will be very glad to have it by word of mouth, ... you want to see him, go!"（224）とジョーに言い，彼女に押し切られる形でロンドン訪問が決まる。実際は，ハヴィシャムも "You air in correspondence with Mr Pip?" とジョーに手紙のやり取りの確認をしていることからもロンドンに行く必要すらない件であった。ジョーは訪問の最後に "I will now conclude – leastways begin – to mention what have led to my having had the present honour." とエステラに関する情報を話し，それを聞いたピップは，"if I had known his errand, I should have given him more encouragement."（224）と後悔する。ピップが本来の目的を知っていたら，ジョーがハヴィシャムの指示通り手紙で済ませておけば，つまりビディの介入がなければ，ジョーとピップのすれ違いは避けられた。これはビディがジョーの依頼をロンドン訪問というまったく異なる案件にすり替えた結果生じた事態である。ジョーから手紙を書くように頼まれ，その後ロンドン訪問をジョーに促すまで，ビディは "a little hang back"（224）と間を置く。ピップがジョーのロンドン訪問に難色を示すことも，またエステラの件だと知ればピップが態度を変えることもこの「ちょっと」の間に彼女は察し，この一瞬のうちに意図的に 2 人の関係悪化を招くロンドンでの面会を仕組むことができた。

ジョーは，手紙を送るという行為と本来の目的であるハヴィシャムの言伝をそれぞれ別個の案件にさせられたことで迷走し，ビディによってピップとの面会を余儀なくされるのである。ことの顛末を推測できずに，ビディの思惑通りにピップとの関係悪化を招くジョーはやはり鈍いのである。

経緯と動機

17 章に描かれるピップとビディのやり取りから彼女にどのような意図が芽生えたかを検証することができるだろう。ピップがビディに対し “I should have been good enough for you; shouldn’t I, Biddy?” と告白したあと，彼女は “Yes; I am not over-particular.”（XVII, 128）とピップの告白を受け入れる。しかしこの返事の直後にピップは “I was disconcerted, for I had broken away without quite seeing where I was going to.”（128-9）と話の方向性に迷いながらも，エステラへの恋心を “I want to be a gentleman on her[Estella’s] account”（129）と吐露し，その後 “If I could only get myself to fall in love with you[Biddy]”（131）と言う。このピップの優柔不断な発言の直後に “you never will” とビディは答える。その後のビディのピップへの “Shall we walk a little farther, or go home?” という 2 度の問いかけに，ピップは “we would walk a little farther”（130）と返事をする。この 2 度の問いかけは暗にエステラをとるか自分をとるかの二者択一をピップに迫る尋問だろう。Robert G. Garnett が “Pip’s divergent impulses are embodied in the two women he loves in different ways. Estella representing the lure of emotional and sexual intensity, Biddy the appeal of domestic moderation and stability.”（p. 38）と述べるように，“home” という言葉はビディを象徴する。その証拠に自らは決してロンドンに赴かず，田舎に留まり教師になることを志す。ピップを田舎に引き留めようとするビディの気持ちとその気持ちを無視された彼女の怒りにピップは気づいていない。問題はピップに捨てられたのではなく，彼にとってビディは留保であり，彼の積極的選択の結果でないことを彼女に暴露したことである。Rose Patricia O’Malley はこの作品の女性の登場人物の役割についての論考の中で，“Pip has considered Biddy to be his patient alternative to Estella, with her generosity and humbleness making her Estella’s natural rival for

his affections."（p. 12）と分析する。しかし，ビディの "you never will." という表現はピップの気持ちはきっと変わらないだろうという推測だけでなく，ピップの里帰りを受け入れないという彼女の意志をも露わにする。ピップの発言は友人関係または男女の関係を破綻させるにも十分無礼で，不謹慎で，不注意である。またこの発言はビディが寛大で謙虚ではいられずにピップに復讐を誓う動機となりうるだろう。ロンドンでピップに鍛冶屋や田舎への嫌悪感を引き起こすぎこちないジョーの手は，17 章でピップにさしのべられた "a comfortable hand though roughened by work"（129）という彼女の手を想起させる。悪女の条件について堀江珠喜は「犯罪小説において，事件に関わる悪女には，いわゆる「プロバビリティの殺人」を狙い，成功する者もいる。あくまで実行犯は他におり，安全地帯で遠隔操作をしているずる賢く要領のいい悪女だ。…自分の魅力で男性を意のままに動かし，自らの手は汚さずに，自己実現や願望を成就させてゆくような，強かな悪女こそが，語るに足るタイプだろう」（p. 176）と述べる。ビディが田舎を離れずピップとの直接的接触を回避しながら，ピップが不満を抱くジョーを介してピップへの報復を企むビディはこの悪女の条件にあてはまる。田舎の労働者ジョーの手は彼女の「荒れた手」の分身である。ビディは復讐達成のためにジョーをも利用する悪女になる。

2度目のジョーのロンドン訪問

57 章に描かれる 2 度目の訪問でジョーの矛盾した態度やかみ合わないピップとの会話はビディの策略を物語る。ジョーはこのロンドン訪問から帰省した 3 日後，ビディと結婚することから，この訪問時にはすでに 2 人は結婚の約束をしていたことになる。ピップが遺産相続人であった囚人マグウィッチの国外逃亡に失敗し，彼の死後，ピップも病床に伏せていることを知ったジョーはロンドンのピップをビディの勧めによって再訪する。ピップは遺産やその送り手の正体をジョーに話そうとするが，ジョーは "[t]hen why go into subjects, old chap, which as betwixt two sech must be for ever onnecessary? There's subjects enough as betwixt two sech, without onnecessary ones."（LVII, 468）と言って 2 人にとって「不必要」な話を遮る。ジョーは，

"... do not let us pass remarks upon onnecessary subjects. Biddy giv' herself a deal o' trouble with me afore I left（for I am almost awful dull）as I should view it in this light..."（469）と，この訪問とビディとの関係に触れる。ピップは"... the sweet tact and kindness with which Biddy – who with her woman's wit had found me out so soon – had prepared him for it, made a deep impression on my mind."（469）と不必要なことで時間を割くべきでないというビディの気配りと捉え彼女に感謝する。確かに遺産相続の件はジョーが知らなくてよい不必要なことだろう。ただ不自然にも，ジョーは会話の中で，自分のことを"Is he right, that man?"，"in general he's more likely wrong"（469）と，自分のことをまるで人ごとのように三人称で呼び，ピップも"[a]s I became stronger and better, Joe became a little less easy with me."（470）と彼の異変に気付く。またジョーは田舎の郵便配達員について"being formerly single he is now married..., but ... marriage were the great wish of his hart –"（464）と話すがビディとの結婚については話さない。つまり，ジョーもしくはビディの考える「不必要なこと」とは自身の結婚のことである。ジョーは結婚話を避けようとするあまり，その結婚の当事者である自分のことまでも他人事のように扱い，自分を三人称で呼んでしまう。しかし，お互いを親友と呼び合う関係の 2 人にとって，彼らの結婚については共有されるべき情報である。ジョーに歯切れの悪い応答をさせ，ピップに不安を感じさせているのは，結婚直前のタイミングでジョーをピップに会わせたビディだろう。ここでのジョーの役割は彼女がピップに田舎や彼女自身を意識させ，ピップの不安を煽る装置となることである。

字を書くことができなかったジョーが手紙を書く場面は田舎で起こっている変化も示している。ピップの部屋で手紙を書くジョーの姿は，ピップに"[e]vidently, Biddy taught Joe to write"（464）と思わせる。"Pip's observation of Joe's writing is meant to be humorous, but it also suggests that Biddy put a great deal of time and effort into her tutelage of Joe for him to have gotten so far"（O'Malley, p. 15）と指摘されるように，ジョーが文字を書く様子は指導者の労力を推測させる。彼の識字力の向上は，ピップの姉の死後，彼女の看病という大義名分がないにもかかわらず，ビディが鍛冶屋に入り込み，

ジョーと個人的な関係を続けていたことを示唆する。ジョーの字を書く能力の向上がどれほどビディと共に時間を過ごさなければならなかったかを考えると，ピップは 2 人のこの時点での関係に疑問を抱くべきだった。ジョーがロンドン訪問を彼女に打診すると，彼女は “Go to him, without loss of time” とジョーに促していた。この “without loss of time”（464）という部分に関しては，ジョーとビディの結婚が近いことをも暗示している。つまりビディの急ぎの指示はピップの看病のためではなく，2 人の結婚のタイミングに関係しているように受け取れる。そもそもピップの姉の死後，鍛冶屋を出たはずのビディにジョーがロンドン訪問について相談していることが明らかになった時点で，ピップは 2 人の過度の親密さに気が付かなければならない。

この面会はピップに誤解をもたらした。ビディの結婚について O'Malley は次のように述べ，ピップの物事への理解の不正確さを指摘する。“Of course those, like all of Pip's other expectations, are eventually dashed. When he sees Biddy, he finds that she has not been waiting for him at all: ... This is the final disappointment that leads Pip first to faint in shock, ..., finally awake to the knowledge that he has misunderstood all of the people in his life, even simple Biddy.”（p. 14）。しかし少なくともジョーに対する誤解や偏見はロンドンでの面会時に解けていて，“There was no change whatever in Joe. Exactly what he had been in my eyes then, he was in my eyes still; just as simply faithful, and as simply right.”（467）とジョーを再評価した。同時に，ピップは鍛冶屋の仕事も，ジョー同様にビディをも再評価することになる。ここで生じるピップの誤解はビディに対してのみである。ピップは “what I had in my thoughts（that Secondly, not yet arrived at）”（471）と，ジョーとの面会後，かつての「2 番目」の選択肢を再考する。ピップにとって田舎の鍛冶屋になることとビディとの結婚は妥協であった。鍛冶屋になることが彼女と付き合う前提であるかのように，ピップは “fond of the forge” であるならば，“I might even have grown up to keep company with you[Biddy]”（XVII, 128）と，かつて交わした仮定の話が現実味を帯びるが，彼の帰郷時，ビディだけでなく，鍛冶屋の仕事（彼女は “as good a blacksmith as I[Pip], or better.”（XVII, 126）

であった），そしてジョーまでもがピップから奪われている。2 人の結婚を知った直後，“one of great thankfulness that I had never breathed this last baffled hope to Jo. How often, while he was with me in my illness, had it risen to my lips.”（478-9）と第 2 の選択を思いとどまったピップの心境は，田舎で彼女が待っているだろうという彼の誤解を露呈する。

物語の冒頭から実は示されていたピップの理解力の欠如はこの物語の最後にピップの鈍さを強調する。彼は墓石の形から死んだ両親と兄弟の姿を想像するが，墓石の形がそこに眠る人物とは無関係であることを考えると，彼の外見への想像力には限界や欠陥があることが示されていた。Hornback も “[h]is expectations – that of course Biddy will want him – is selfish, however, and again an indication of a limitation in Pip’s understanding of the world beyond himself.”（p. 104）と分析するように，ピップの不十分な理解力は想像力の欠如と関連付けられる。ジョーに対して “[i]n his working clothes, Joe was a well-knit characteristic-looking blacksmith; in his holiday clothes, he was more like a scarecrow in good circumstances”（IV, 23）というピップの感覚にもジョーの評価の根拠にはなり得ない彼の外見への誤解が見て取れる。エステラとの初対面時の “a common labouring-boy!”，“what a coarse hands he has”（VIII, 60）という彼女のピップへの評価は，外見によるものであることを考えると正当性を欠くものだが，ピップに自分自身への偏見を持たせ，“I want to be a gentleman on her[Estella’s] account”（XVII, 129）と決意させる。Kathleen Sell は “he[Pip] comes to define ‘gentleman’ as someone who would be worthy of Estella’s attentions, in other words someone with a genteel veneer both in manners and body, and as someone with expectations.”（p. 205）と分析する。実際，彼のロンドンでの生活ぶりは「見せかけ」の紳士と見なされるだろう。「見せかけ」である以上実際は紳士ではなく，鍛冶屋の徒弟であったピップの正装姿もまたジョー同様「かかし」である。想像力の欠如のために，彼は自分の姿を想像できない。墓石の形が両親の姿であると，遺産の送り手はハヴィシャムであると，エステラとの結婚が約束されていると，自分が紳士であると，そしてビディが田舎で待っていると，ピップは常に誤解や誤算とともに生きている。ビディはピップの理解力の欠如を利用し

て，自分が 2 番目として待っているという希望をピップに持たせる機会としてジョーのロンドン訪問を利用している。ビディは O'Malley が言うほど “generosity and humbleness”（p 12）でも “simple”（p. 14）でもないことは明らかである。

ビディの悪意

ジョーのロンドン訪問からビディの意図が読み取れるが，以下コミュニケーションに見られる悪意について論じる岡本真一郎『悪意の心理学』から引いてみる。彼の分析をもとにビディ，ジョー，ピップの会話や手紙のやり取りにピップを貶めるための彼女の抱く悪意を確認したい。

> コミュニケーションの意図にはその内容を知らせようとする「情報意図」と，情報意図があること自体を知らせようとする「伝達意図」があった。そして両者が備わっているものが「意図明示（伝達）」であった。その点から何らかの攻撃，非難，虚偽などが話し手から聞き手に伝わった場合に関して，「悪意」の程度を順序づけるとすれば次のようになる。…
>
> ①心の中にないことを聞き手に深読みされた。
> ②情報意図も伝達意図もないのに，聞き手に立ち聞きされたり，見抜かれたり見破られた。
> ③情報意図はあるが伝達意図はない。穏意が暗示として伝わった（それとなく伝わった）。
> ④情報意図も伝達意図もある。推意が意図明示的に伝わった（推測ではっきり伝わった）。
> ⑤情報意図も伝達意図もある。表意が意図明示的に伝わった（字義通りはっきり伝わった）。
>
> …そして話し手の側がターゲットにダメージを与えようとする悪意（効果意図）は，あとになるほど大きくなっている。（p. 260）

1 度目の訪問ではピップの嫌うジョーの正装姿，もしくはジョーの訪問そのものがメッセージであった。訪問前の手紙も含め，彼の訪問にはピップに対する攻撃的，挑発的な情報意図も伝達意図もあり表意が意図明示的にピップに伝えられる。2 度目の訪問では田舎を彷彿とさせるジョーの言動や行動が情報意図と伝達意図をもち，推意が明示的に伝わる形ではあるが，ピップにすべての情報が伝わっているとは言えないだろう。実際ジョーの言動から気づくべき田舎の異変をピップは見逃している。相手に情報が伝わらないことについて岡本は「聞き手がどう解釈するかは別問題」（p. 109）としながら，「相手の推測に委ねることによって，話し手自身は全面的攻撃をしたのではない，多かれ少なかれ免責される」（p 115-6）とも述べる。ビディは彼女自身の攻撃であることを，または攻撃であること自体を見破られずにジョーをメッセンジャーとして使っている。ジョーが字を書けるようになっていることはビディとジョーの長期間にわたる共同作業を，そして郵便局員の結婚話はジョーとビディの結婚を推測させるものであった。ジョーは自分の行動や言動が彼女の意図を反映するものとの自覚はないが，その行動自体が彼女のピップへの情報意図となり，伝達意図となる。ジョーの訪問はピップに故郷とビディを意識させる効果は十分で，実際ピップは回復後すぐに帰郷するが，帰郷に合わせるかのようにビディとジョーの結婚式が行われたことは作為的である。

上述したように，ビディは手紙やジョーを利用し間接的にピップと接触を図り，彼女自身がピップを訪問せずにピップの感情を操作していた。しかし，ピップの姉が死んだとき，当時世話役として彼女と暮らしていたビディが当然ピップに知らせるべき訃報を出さないことは不自然である。このような手段について，ヨーロッパの文学作品を取り上げファム・ファタールの分析を行う鹿島茂は『悪女入門』で「ファム・ファタルを志すあなたが習得すべきは，この「不在」のテクニックです。すなわち，男は，あなたがそこに「いる」から恋するようになるのですが，「いない」とわかったとき，恋はもっと深まるものなのです。…適度の「不在」は男を確実に恋の深みに誘いこみます。」と指摘する（p. 197）。このテクニックはハヴィシャムも利用していた。ピップに事前連絡なしにエステラを留学さ

せ不在にし，彼に “Do you feel that you had lost her?”（116）と尋ねる。ピップは彼女の問いに，“There was such a malignant enjoyment in her utterance of the last words”（XV, 116）とはっきりと悪意を感じとっている。ハヴィシャムからのエステラの留学と帰国に関する言伝の内容をジョーを通して知っていた彼女なら，重要な連絡を取らないことがピップに自分を意識させる「不在」という手段であることを認識し，同じ行動をピップに取ることは十分可能である。ピップにエステラへのさらなる恋愛感情を引き起こす目的で不在のテクニックを利用したハヴィシャムに悪意が見られるなら，自分に意識を向けさせるために必要な手紙を出さなかったビディにも同様の悪意を認めることができる。この「不在」のテクニックにもビディのピップを動揺させる巧みな心理戦を読み取ることができるが，彼女の悪意はピップに気づかれずに免責される。子供のころピップが誉め言葉として，ビディに “You are one of those, … , who make the most of every chance.”（XVII, 126）と彼女の利発さを指摘するとおり，その能力は「不在」のテクニックとしてピップの姉の死を利用することでも実行される。ピップのビディへの評価は皮肉にも正当なものである。

ファム・ファタール，ビディ

ファム・ファタールについて鹿島は「ある女が，財産や美貌や将来性といったプラスの価値をたくさん持っていた男をゼロ価値にまで引きずり降ろした場合，世間ではこの女をファム・ファタルと呼びますが，正確には，この呼称は正しくありません。というのも，語の正しい意味でのファム・ファタルとはゼロ価値段階の堕落では決して満足せず，マイナス無限大のところまで男を引きずっていかなければ気がすまないものだからです」（p. 32）と悪女の特性について述べる。ピップが紳士になれないことが彼の最大の凋落に見えるが，ビディはピップの紳士生活の堕落に一切かかわっていない。確かに一度は莫大な遺産を相続したピップがプラスの価値を所有したのは事実であるが，彼が紳士になることをあきらめた原因は，財産の贈与者がオーストラリアに流刑になった囚人マグウィッチであったことと，彼が密入国後に逃亡に失敗して事故死したことであった。ビディ

の見込んでいたピップにとっての「マイナス無限大」の損失は彼の遺産ではなかったことになる。またビディの復讐がピップとジョーの信頼関係の破壊だけで完結したのではビディのことをファム・ファタールだとは言えないだろう。ピップをさらに堕落させるほどのビディの悪女的行動を探る必要がある。

ビディが悪女なら，彼女がジョーとの間に子をもうけることも必ずしも肯定的に捉えられない出来事であろう。杉山泰は『〈悪女〉の文化誌』の中でD・H・ロレンスの作品をとりあげながらfemme fataleという語について，「すべての辞書の定義に，dangerousとmysteriousとattractiveということばが使われていて，「男性の運命を変える女」，つまり，悪魔につながるイヴという女をどこかで連想させる。」（p. 196）とイヴや出産のイメージにファム・ファタールの要素を見いだせると説明する。この小説で出産に言及される女性登場人物は，まず始めにピップの母親であるが，彼女は死んでいる。冒頭の墓地の場面から明らかである。他にはピップの弁護士ジャガーズ（Jaggers）の家の手伝いモリーと，ピップの親友ハーバート（Herbert）の母親であるポケット夫人（Mrs. Pocket），そしてビディが挙げられる。モリーはエステラの母でありマグウィッチの妻であることが作中で示唆され，ある事件で殺人容疑をかけられ，ジャガーズの弁護による無罪判決後に彼の家で雇われる。7人の子供の母であるポケット夫人は“Mr. and Mrs. Pocket's children were not growing up or being brought up, but were tumbling up.”（XXII, 186）と幼子を放置する。また子供を“inexpertly danced the infant a little in her lap”（188）に扱い，“Mrs. Pocket took it[baby] the other way, and got its head upon the table”（XXIII, 193）するように育児放棄するどころか子供の命を危険にさらしている。この作品では母親となる人物が，墓地，殺人容疑，育児放棄のように悪や罪と関連付けられる。阿部美春はファム・ファタールに関する著述の中で，「イヴやパンドラは，その身体の魅力と生殖力を恐れられ，さらに男性のものとされた知恵を求めたことでいっそう恐怖をかきたて嫌悪される存在となった。」（p. 85）と子を産める身体的特徴と，知恵をも持ち合わせる女性に悪の要素が見られると指摘する。教師になるビディと，周囲で子供が騒いでいても“as if she had been

reading for a week”（187）と読書に耽るポケット夫人は知恵を求める女性の象徴と言えるだろう。鶴見良次は近代イギリス社会における知恵のある女性の描かれ方についてオリヴァ・ゴールドスミス作ともされる『靴二つさんの物語』（1765）の女教師である主人公マージョリーを例に，彼女は「村人たちに科学的な知識を与えたために魔女として非難されたり，…古い世界像からの脱却を村人に促したりする，古い文化と新しい世界観を媒介する存在としての不安定な位置にある女教師でもある。この時期の児童文学を特徴づけるもう 1 つのものが，このマージョリーのもつ「魔女」と「女教師」との複合的な性格であると言える」と賢い女性が必ずしも肯定的に捉えられていないことを述べる（pp. 70-71）。 同様に，ビディが “I am going to try to get the place of the mistress in the new school” と言い，“I hope I... teach myself while I teach others.”（XXXV, 282-3）と考えている。ビディは田舎で教師としてピップと村の子供たちに，そしてのちにはジョーにまでも読み書きを教え，そのジョーが彼女の指示通りの行動をとることでピップを翻弄することを考えれば，ビディの行為には魔女的で悪女的な素質も見出せるだろう。また出産を通してポケット夫人は子供たちを災いに導き，ビディはピップを田舎から追放する様子からもこの作品で知恵を追求し出産を経験する女性が不穏な存在であることがわかる。

最終的に出産によってビディはピップを脅かす悪女，ファム・ファタールを象徴する存在になる。ピップは 2 人の結婚後，“Dear Joe, I hope you will have children to love”（LVIII, 479）と，場合によっては出産が必ずしも祝い事であるわけではないことと認識せずに，子供を産むことを勧める。その後ピップが 11 年間の海外での仕事を終え帰郷すると誕生している子供に，“we[Joe and Biddy] giv him the name of Pip for your sake” と 2 人で名前を決めたことを説明する。ジョーとビディにとってこの新しいピップは 2 番目のピップであるが，その子は実子で，鍛冶屋の正統な跡継ぎであり，もはやピップには鍛冶屋にも故郷にも居場所がなくなる。ピップに作品の冒頭で示された欠如には想像力以外にも，自分の名前である “Philip” という名前を舌足らずのために “Pip”（I, 3）としか言えない名前の一部の欠如に加え，両親と兄弟を亡くしていること，ポケットの中の食べ物をマグ

ウィッチに奪われることが示されていた。彼の持ち合わせるものは田舎という居場所と鍛冶屋という身分だけである。ビディの 2 人目のピップの出産によって，ピップはこの村から追放されたのも同然である。ピップにとって生まれ故郷という居場所と鍛冶屋の身分の損失は「マイナス無限大」（鹿島，p. 32）であり，象徴的な死をも意味するだろう。ビディはピップにとってかけがえのないものが故郷であり鍛冶屋という身分であると知っていたからこそ，ピップに最大の復讐を遂行することができた。

ピップはビディのことを最も賢く，またどんな機会もうまく利用する女性であると分析をしているが，この物語を書いている大人になったピップが彼女への皮肉や嫌味としてこれらの言葉を使っているなら，ピップはビディが悪女であることを認識していることになる。しかし，かつて “roughened by work”（XVII, 129）であったビディの手が触れると，“good matronly hand”（LIX, 481）と彼女の手を好意的に捉えるピップの態度には，ビディを悪女にさせたことを自覚できないほどのピップの鈍さが滲み出る。

結論

この小説はビディの企てた復讐が失敗に終わる物語である。ビディはピップにエステラを忘れさせ，最後にジョーと結婚することでピップとジョーの関係を破綻させるだけでなく，ピップの第 2 の希望を剝奪することで復讐を完結させなければならなかった。最終章でビディのピップへの “Have you quite forgotten her[Estella]?” という質問は彼女の復讐が達成できたかどうかの確認である。ピップは “I have forgotten nothing in my life”（LIX, 482）と最後までエステラへの未練すら思わせる返事をする。復讐が成功したなら，ピップにはエステラではなくビディに未練を残すはずであるが，それどころかピップにはビディを不快にさせた反省もない。彼女の復讐の失敗は彼女自身の計画にではなくピップの鈍さに起因する。

ピップはビディに悪意を抱かせ，復讐を誓わせるほど無礼な男であった。堀江珠喜は悪女と男の関係について，「つまりファム・ファタルとは，男性を破滅させるために男性によってお膳立てされ，その役割を与えられた女性なのだ。」（p. 186）と言う。子供のころの，ビディとエステラ両者へ

の恋愛感情を天秤にかけ，エステラを選択する決意を当事者であるビディに打ち明け彼女の期待を無自覚に裏切るピップの暴挙が復讐を果たさんとする悪女ビディを生み出す。ジョーとの面会によってピップを心理的に揺さぶり，また追い詰めるビディは強かである。最終的にビディとジョーの結婚はピップの第 2 の希望を打ち砕く。一見，ジョーがピップからビディを奪ったように見えるこの結婚によって，ピップとジョーの関係は対立し，家族関係や男同士の信頼関係も破綻する条件は整う。しかしピップは彼女が賢いことは十分に理解しているが，その賢さを利用した彼女の悪意に気づいておらず，ジョーとビディの結婚はピップにショックを与えたが，それがビディからの当てつけであることにまではピップの想像力は及ばない。居場所であった故郷を失うことはピップを「マイナス無限大」にまで転落させる事象であるが，育児中のビディの手に触れられたとき，復讐に用いられた彼女の手を “good matronly hand”（LIX, 481）とピップが述べる場面は，彼の無邪気さを示している。ビディの悪意と復讐はピップに見過ごされてしまうのである。

物語の冒頭で示されたピップの想像力の欠如は彼の鈍さの象徴である。自分が鈍いことに気づけるジョーと違い，ピップは自分が鈍いことにすら気づけないほど鈍いのである。皮肉にもこのピップの鈍さがビディを悪女に貶めずにいる。Moynahan の “the lost paradise where Biddy and Joe, the genuine innocents of the novel, flourish in thoughtless content.’”（p79）とビディを無垢な存在と認める分析は，ビディの悪意に気づかないピップの鈍さゆえにできる解釈である。ピップが彼女の悪意に気づかないため，悪女になれないビディはピップへ復讐を果たせない。この物語はピップの鈍さがビディの復讐を無効化し，ジョーとの関係も破綻させず，また皮肉にもビディが悪女ファム・ファタールになることを回避させてしまう，隠された復讐物語である。

引用文献

Dickens, Charles. *Great Expectations*. Penguin Books, 1996. 本文中の引用はすべてこの版を使用した。（ ）内には章とページ数を記してある。

Garnett, Robert G. “The Good and the Unruly in *Great Expectations* – and Estella.” *Dickens Quarterly*, vol. 16, 1999, pp. 24-41.

Gilmour, Robin. *The Idea of the Gentleman in the Victorian Novel*, George Allen and Unwin, 1981.

Hornback, Bert G. *Great Expectations: A Novel of Friendship*, Twayne Publishers, 1987.

Moynahan, Julian. “The Hero’s Guilt: The Case of Great Expectations.” *Essays in Criticism*, Vol. 10, 1960, pp. 60-79.

O’Malley, Rose Patricia. “*Great Expectations* and the Evolution of Women.” *Dickens Studies Annual*, vol. 50, 2019, pp. 1-19.

Sell, Kathleen. “The Narrator’s Shame: Masculine Identity in *Great Expectations.*” *Dickens Studies Annual*, vol. 26, 1998, pp. 203-26.

阿部美春「メアリ・シェリーの『ヴァルパーガ』—ふたりの「ベアトリーチェ」聖女とファム・ファタール」現代英語文学研究会編『〈境界〉で読む英語文学』開文社出版，2005年.

岡本真一郎『悪意の心理学』中公新書，2016年.

鹿島茂『悪女入門』講談社現代新書，2003年.

杉山泰「D・H・ロレンスが描き出す「月の女神」としての「魔女」」鈴木紀子，林久美子，野村幸一郎 編著『〈悪女〉の文化誌』晃洋書房，2005年.

鶴見良次『イギリスの忘れられた子供の本』朝日出版社，2023年.

堀江珠喜『男はなぜ悪女にひかれるのか』平凡社新書，2003年.